



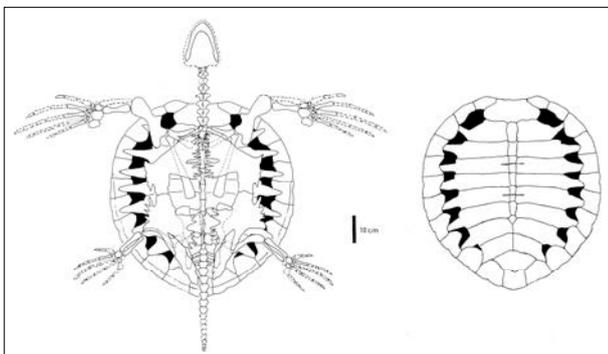
平成22年（2010年）は メソダーモケリス 発見30年 （模式標本HMG-5：1980年発見）



↑複数の化石を元に復元された、全身骨格（左）
右は、現生のアカウミガメ

メソダーモケリスの発見

- ・模式標本（HMG-5）は、1980年に博物館協力会の石崎正行氏（故人）と荒木新太郎氏が発見。
- ・平山廉氏（現・早稲田大学教授）らの研究により、新属新種と判明（1996年論文発表）。
- ・論文に基づいて、全身復元骨格が作製された（穂別博物館展展示室）。



↑全身復元骨格図（左：腹側、右：背側）
(Hirayama and Chitoku, 1996)

アノマロケリス実物化石 →
別名「ホベツ アベ ツノガメ」
1981年に阿部利春氏が発見。
背のこうらが見つかった。

もしき
模式標本：種類の基準となる標本のこと

メソダーモケリスとは

- ・学名は「中生代（メソ）のオサガメ（ダーモケリス）」の意味。
- ・今のオサガメ（最大のウミガメ）の祖先。
- ・オサガメよりも骨格ががっしりしている。
- ・穂別で数多く発見されている（穂別博物館収蔵だけでも17点）。
- ・別名「イシザキ ムカシ オサガメ」。



↑メソダーモケリス模式標本（HMG-5）の一部
背のこうらのほか、腹のこうら、腕や足など。

メソダーモケリスの進化史

- ・穂別では7000万年前（白亜紀後期）に生息。同時代にはモササウルスやアンモナイトがいた。
- ・白亜紀の終わりとともにモササウルスなどは姿を消すが、メソダーモケリスは生きのびて、現在のオサガメにつながった。



ところで...

平成23年（2011年）は
アノマロケリス発見30年
（リクガメ）

カメの年が続きます。

（学芸員 桜井）

アンモナイトの秘密 1



写真は、博物館の展示「白亜紀の海の生物」で、いろいろな生き物の復元模型があります。その中には、みなさんが良く知っているアンモナイトもあります。アンモナイトの復元模型には、殻からたくさんのおうで（触手）のようなものが伸びています。また、目もあります。

アンモナイトは、絶滅した動物で、化石でしか見つかりません。そして、この目やうでのように柔らかい体

（軟体部）は見つかりません。それでは、なぜ、アンモナイトは写真のように復元されているのでしょうか？ また、アンモナイトはいつごろ生きていた動物で、どんな種類がいるのでしょうか？ 次号のホッピーだよりから、アンモナイトについて詳しく紹介していきます。お楽しみに。

（普及員 西村）

2010年は、色々な化石発見の記念の年



35年

ホベツアラキリュウ化石 発見35年

荒木新太郎氏（穂別在住）が最初の標本を発見（1975年）、2年後に発掘（1977年）



25年

モササウルス類 ティロサウルス 発見25年（HMG-371）

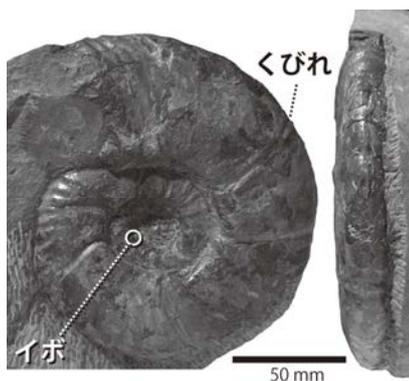
金子由三氏（上川町・当時）が化石を発見、地徳力（当館元学芸員）が採集（1985年）



15年

モササウルス・プリズマティクス 発見15年（HMG-1065）

渋谷直憲・川上源太郎（当館元学芸員）が化石を発見（1995年）（右上は、分離した歯）



むかわの化石や生き物<穂別のアンモナイト> *Patagiosites compressus* パタジオシテス・コンプレッサス

くびれがたくさんあるアンモナイト。小さい頃は、くびれの臍側の部分にイボがある。殻の太さは細い。約20cmまで成長する。白亜紀マストリヒチアン期前期（約7000万年前）に生息。富内産の3個体の標本をもとにして、1954年に記載された。

（普及員 西村）

2009年12月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

■：休館日
12/24は23（祝日）の振替休館日
12/31は年末の休館日
（新年は、1/6から開館）

平成22（2010）年は、メソダーモケリスの模式標本が発見されて30年目になります。その他にも、記念の年となる化石がいくつもあります。化石の発見や当館への寄贈に協力頂いている方々に、改めてお礼を申し上げます。（さ）